

## 郷医の医学研究所を創設

小美玉市小川に平成31年(2019)3月、廃校となった旧市立小川小学校がある。その碑は、同校玄関前、人の手が入らなくなった松の木々に囲まれ、ひっそりと建っている。碑の銘は「水戸小川<sup>けい</sup>稽<sup>い</sup>醫館」。江戸時代後期の文政元年(1818)に建立、と書いてある。

名前から医学館の碑とわかるが、「稽古」の「稽」の字が付いている。稽の字は「考える」、「よせあわせて考える」(『漢字源』)という意味がある。

つまり、小川の地に江戸時代、医者が寄せ集まって考える医学の館があった、という事実をこの碑は伝えている。当時の小川村は水戸藩領だった。このため、「水戸小川」と書かれたのであろう。

“医者が寄せ集まって考える医療”という考え方は、今日にも通じる。一人の医者では治療が難しい病気も、多くの医者が集り、知見や経験を活かせば、様々な治療の可能性を見出せる。

旧小川村に当時、医を生業とする本間家があった。同家四世の本間道意は、馬場村(現小美玉市下馬場)の庄屋で村山儀衛門の長男(義見墨齋)を養子に迎えた。幼少から学才を認められた墨齋は、名を玄琢<sup>げんたく</sup>(1755-1824)と改め、本間家五世を継いだ。

医学を修めた玄琢には、持論があった。「医者<sup>は</sup>人間の生命を預かる大切な役人であるが、田舎には良医に恵まれないために、助かる病人を死なせてしまうことがある。しかしたとえ田舎医者でも何人かが一堂に会して、問題の症状に対して討論をつくし、疑いを正して適正な投薬をすれば助けることができる」(『小川町史』)。

玄琢は、持論を行動に移した。領主である水戸藩6代藩主、徳川治保<sup>はるもり</sup>に対し、郷医の医学研究所創設を願い出たのである。文化元年(1804)、玄琢50歳の時だった。

その願いは認められ、「稽医館」の名も賜った。小川城址にあった水戸藩運送庁の空き建物

## 本間玄琢

*Honma Gentaku*

を使い、稽医館が開館した。

玄琢は、月2回の研修会を開いた。研修会には、近在のほか、水戸や常陸大宮など遠方から多くの医者が参加。「東西の医術の特徴、長短を比較検討したり、難病奇病の施術法を討論したり、また、種痘や手術の実習を行うようになった」(『小川町史』)。

稽医館は、医学書など図書類の蒐集にも熱心だった。文化2年(1805)、「請進納稽医館図書記」と書いた木版印刷の趣意書を領内に頒布し、図書の寄贈を呼びかけた。最終的に3,000冊近い寄贈を受け、文字通り医学・医療分野の学術的拠点となった。

こうした功績が認められ、玄琢は文化2年、名字帯刀を許された。さらに文化5年(1808)には水戸藩医員に就任。稽医館は安政5年(1858)、郷校に改名され、武館を新たに設置し、幕末の争乱を経て慶応元年(1865)、廃止となった。

玄琢が掲げた医者たちの連携と協力、相互研修の精神は、医師不足や医療機関の偏在

という課題を抱える本県にとって、もっと光を当てて向き合っても良い世界と言えるだろう。(文中敬称略)

主な参考文献

『小川町史 上巻』(昭和57年、小川町発行)。『小川町史下巻』(昭和63年、小川町発行)等。



松の木々に囲まれ、ひっそりと建つ「水戸小川稽医館」の碑  
=小美玉市小川(筆者撮影)

偉人から読み解く「相互研究」のヒント

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長  
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一